

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6 月 10 日現在

機関番号：32685

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820068

研究課題名（和文） 『源氏物語』全註釈のための基盤形成

研究課題名（英文） The base formation of whole annotations of the "Tale of Genji"

研究代表者

上原 作和 (UEHARA SAKUKAZU)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：00581050

研究成果の概要（和文）：本研究は『源氏物語』全註釈の基盤形成を目的として実施したものである。まずは、全註釈の基幹となる「本文」について、全国に約300セットある伝本の検出から、本文系譜をわたくしなりに再建した。その上で『源氏物語』「本文史」を策定した。くわえて、過去にわたくしが作成した注釈データの校閲を実施し、現時点で最善の注釈データを整備したのである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to serve the base formation of whole annotations of the "Tale of Genji". First I rebuilt the genealogy of the texts which about 300 sets exist in Japan, then settled the transition of the text. Moreover, checking the notes data which I had made before, I established the best notes data at the present time.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,310,000	693,000	3,003,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：『源氏物語全註釈』、本文批判、歴史的規準、『光源氏物語傳來史』、大島雅太郎、吉見正頼、本文解釈史、『人物で読む源氏物語』

1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』研究史は日本文学において最も豊饒な研究成果を有する。しかし、全註釈は近代以降の研究史でも十指に満たず、最新の成果が反映していない憾みがあった。いっぽう、研究代表者(上原作和、以下同じ)は、『源氏物語』の註釈史に関する研究がその立脚点であった。そこでこれらを集大成するべく、

まずは、その基盤整備の必要性が生じてきたのである。

そもそも、研究代表者における代表的な著作『光源氏物語學藝史』(2006年)『光源氏物語傳來史』(2011年)に著述した学説は、『源氏物語』註釈史、本文史に新見解を加えんとする試みであった。最新の後者における代表的な学説を三点に要約しておく。

第一に、現在、戦国時代とも言える『源氏

物語』の諸本研究に関して、藤原定家の証本・青表紙本のその原本に、父藤原俊成所持本の流れを汲む伝阿仏尼等筆本文を想定した。これにくわえて、最近、研究代表者は、『源氏物語』の本文系統について、従来の青表紙本系、河内本系、「別本」の二系統三分類案を再編し、これらの伝本群を河内本と対置させることで、撰関家伝領本系、青表紙本系、改作本系と三つに細分類する試案を提示した。

第二に、伝阿仏尼等筆本文、大島雅太郎旧蔵・伝飛鳥井雅康等筆本の伝来史の全容を解明した。合わせて、徳川・五島本源氏物語絵巻が白河法王に献上された正本ではなく、撰関家に残された副本であるとの仮説を提示した。これらによって、本文批判における「歴史的規準」を策定し、本文史研究の前提を整備した。

第三に、「紫式部日記」に見える『源氏物語』の浄書本と草稿本とが、今日の本文系統にも継承されており、前者が「青表紙本系統」、後者が「撰関家伝領本系」とに大別し得ると言う仮説の提示を行った。

これらの学説が理論編であるとすれば、『源氏物語全註釈』は、さらにこれを実践、敷衍するための統合的研究であると言える。これが研究実施の背景にあった。

2. 研究の目的

『源氏物語』全註釈のための基盤形成を行い、本文史の策定、注釈史の検討、ならびに現代語訳のもととなる電子データを作成することを目的とした。

『源氏物語』に関する研究者単独による全註釈は、書籍版では玉上琢弥の『源氏物語評釈』（角川書店、1964年）、Web版では渋谷栄一『源氏物語』（2002年）を数えるばかりで、稀少な研究成果となる。

研究代表者は『人物で読む源氏物語』（2005-6年）によって、『源氏物語』全体の三分の二の註釈を終えている。

本研究によって、五四帖全体の本文校訂を完成させ、併せて、全註釈、現代語訳を施すための基盤構築を課題とし、これを実現するための環境整備を行うことが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

『源氏物語』の主要伝本の影印を収集しつつ、その本文史を策定する。また同時並行として注釈作成のための基礎データを作成する。

具体的な作業工程は以下の通りである。

①底本の選定 現在の『源氏物語』の諸本研究は、従来の青表紙本系、河内本系、「別本」の二系統三分類案を申請者が再編し、河内本と対置させることで、撰関家伝領本系、青表紙本系、改作本系の三つに細分類する試案を提示したところである。したがって、底本も撰関家伝領本系、青表紙本系の二本を並立させるのが妥当であると思量される。

つまり、『源氏物語』諸本の展開は、寛弘五年（1008）十一月の御草子作りに遡源され、浄書本と草稿本二種類の本文が伝播して現在の二系統三分類の本文系統が生成されたものと申請者は考えている。このことは、了悟『光源氏物語本事』（1264～1274）が、撰関家伝領本を評価の前提としながら、京極中納言の本（青表紙本）を「こと葉もよのつねよりも枝葉をぬきたる本」と批判し、河内本を「孝行が本」と呼び慣わしながら、「関の東の人々がら大きな草を用ひ」、本文を弄んだようなどころのある「わるき本」と喝破したことが想起されるのである。

そこで、『光源氏物語傳來史』（2011年）において提示した「歴史的規準」を以て本文批判の規準とする。そこで『源氏物語』の著名な対立異文を「歴史的規準」に照らしてみると、〈喩〉を基軸として二項対立する本文群を成していることが判明する。これに後代の本文の「刈り込み」と雑駁な書写による異同が発生して第三項の本文群が発生したと言う仮説が成り立つ。したがって、この時点で本文再建上、必見の伝本としてはグルーピングされない第三項本文群が除かれるのである。

とするなら、後人の恣意的補筆とは認められない異同の場合には、紫式部当人の草稿本と浄書本という実体的なレベルの二項に還元して考えて良いことになる。しかも、その基本的な推敲の理路として〈喩〉概念が認められることは、論文化したところである（『記憶の創生 〈物語〉1971-2011』2012年）。1980年代の物語研究の〈喩〉概念は、「直喩」「引喩」等に細分化するのではなく、これらを包括しつつ、「比喩的な関係で取り結ばれた事象の、その相互の関係性をさす」ものとして推進されてきた。この理論を本文生成の基本概念として本文批判に援用して見ようと言うのが本研究なのである。

これは本文研究が「一本を見つめること」に焦点化されていた時代の終焉を意味し、かつ、〈喩〉概念を通して、物語が語ろうとしていたものを諸本の異同の関係性の中に再発見することが喫緊の課題であると言う見通しに立つものである。

したがって、『源氏物語』五四帖の対立異文を網羅的に検討しながら、ふたつの五四帖本文の文校訂を行い、異同を明らかにしつつ、

併せて、全註釈、現代語訳を施すための基盤構築が当面の課題となる。かつ、これを実現するための環境整備を行うことが、本研究の目的である。

②註釈の新見解 『人物で読む『源氏物語』』(2005～2006年)を整備した註釈データベースを基に、上記のような二つの本文の異同を勘案しながら新見解を提示したことになる。

③現代語訳 現代語訳は、現時点で「青表紙本系統」を底本としたものに限定される。「撰家伝領本系」本文による現代語訳を準備したことは、やがてこれが完成すれば本邦初のものとなる。

4. 研究成果

平成22年度は「『源氏物語全註釈』のための基盤形成」の初年度として、各種データのリスト作成、ならびに資料収集を行った。平成23年度は、「研究の目的」を達成すべく、特に重要写本の来歴を通して、本文批判の「歴史的規準」の策定に重点を置いた。その成果が武蔵野書院から平成23年に刊行した『光源氏物語傳來史』である。本書によって、『源氏物語』研究において最重要視されて来た大島雅太郎氏旧蔵本『源氏物語』の夥しい本文補正や書き入れが、吉見正頼の時代に行われていたことを実証したことは特筆される成果である。今まで『源氏物語』の本文校訂は、校訂者の長年に亘る『源氏物語』観に立脚したいわば感性によってなされてきた職人技であった。したがって、校訂規準が曖昧なまま行われていた傾向にあった。そこにひとつの明確な規準を敷設したことで、吉見正頼以前の本文を重視する方向性が固まったと言える。

また、「研究の目的」、「研究実施計画」に添って『人物で読む源氏物語』全20巻によって行った註釈の補訂を行い、その註釈データは最新の見解に書き改められた。『源氏物語』の本文解釈史は、広汎多岐に渡る論争があり、その論争の当否を見定める先行論文の検討を漸次行いつつの補訂ではあったが、上原自身が学説史の当事者である「夕顔」巻、「朝顔」巻の解釈については、これに関する批判論文が存在し、さらに第三者による検証も行われたが、いずれも決着を見ていない。これらはいずれ、上原自身の最終見解を以て、註釈に新見解として加えることとなる。

かくして、『源氏物語全註釈』のための基盤形成は、多くの成果を残した。このことは、当年発表の学術論文、単行本によって証されよう。論文は『枕草子』『うつほ物語』に関する論文もあるが、これも『源氏物語』の文学世界と密接な関連を有し、当然、本研究の成果の範疇に加えられるべきものであ

る。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

上原作和「覚醒としての〈楽〉——『うつほ物語』の「胡笳の調べ」、あるいは「幸福の護符」の物語」「国文学 解釈と鑑賞」2011年8月(99-106)頁。

〔学会発表〕(計1件)

上原作和「佐渡時代の大島本『源氏物語』と桃園文庫」中古文学会春季大会。2011年5月27日 日本女子大学

〔図書〕(計5件)

上原作和『光源氏物語傳來史』武蔵野書院・2011年 単著 318頁

日向一雅編『源氏物語と音楽 文学・歴史・音楽の接点』青簡舎・2011年 単著 248頁(123-162)

伊藤鉄也編『もっと知りたい池田亀鑑と源氏物語』新典社・2011年 共著282頁(250-254)

小森潔・津島知明編『枕草子 創造と新生』翰林書房、2011年 共著 375頁 (178-193)

上原作和・廣田収編『紫式部と和歌の世界 一冊で読む紫式部家集 訳注付 新訂版』武蔵野書院・2012年 共編 319頁(117-319)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

<http://www.asahi-net.or.jp/~tu3s-uehr/profile.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者 上原作和（教授）
明星大学・人文学部
研究者番号：00581050

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし